

女体

芥川龍之介

青空文庫

楊某ようぼうと云う支那人が、ある夏の夜、あまり蒸暑いのに眼がさめて、頬杖をつきながら腹んばいになって、とりとめのない妄もうぞ想うに耽たっていると、ふと一匹の虱しらみが寢床の縁ふちを這はっているのに気がついた。部屋の中にもした、うす暗い灯ひの光で、虱は小さな背中を銀の粉こなのように光らせながら、隣に寝ている細君の肩を目がけて、もずもず這はって行くらしい。細君は、裸のまま、さつきから楊の方へ顔を向けて、安らかな寢息を立てているのである。楊は、その虱ののろくさい歩みを眺めながら、こんな虫の世界はどんなだろうと思った。自分が二足か三足で行ける所も、虱には一時間もかからなければ、歩けない。しかもその歩きまわる所

が、せいぜい寢床の上だけである。自分も虱に生れたら、さぞ退屈だった事であろう。……

そんな事を漫然と考えている中に、楊の意識は次第に臃おぼろげになつて来た。勿論夢ではない。そうかと云つてまた、現うつつでもない。

ただ、妙に恍惚たる心もちの底へ、沈むともなく沈んで行くのである。それがやがて、はつと眼がさめたような氣に歸つたと思うと、いつか楊の魂はあの虱の体へはいつて、汗臭い寢床の上を、蠕々ぜんぜんぜん然として歩いている。楊は余りに事が意外なので、思わず茫然と立ちすくんだ。が、彼を驚かしたのは、独りそればかりではない。――

彼の行く手には、一座の高い山があつた。それがまた自らおのずかなるまる円

みを暖く抱いて、眼のとどかない上の方から、眼の先の寢床の上まで、大きな鍾しやうにゆうせき乳石のように垂れ下つている。その寢床についている部分は、中に火気を蔵しているかと思うほど、うす赤い柘榴ざくろの實の形を造つているが、そこを除いては、山一円、どこを見ても白くない所はない。その白さがまた、凝脂ぎようしのような柔らかみのある、滑なめらかな色の白さで、山腹のなだらかなくぼみでさえ、丁度雪にさす月の光のような、かすかに青い影を湛たたえているだけである。まして光をうけている部分は、融けるような鼈べっこういろ甲色の光沢を帯びて、どここの山脈にも見られない、美しい弓なりの曲線を、遥はるかな天際てんがいに描えがいている。……

楊ようは驚嘆の眼を見開いて、この美しい山の姿を眺めた。が、そ

の山が彼の細君の乳の一つだと云う事を知った時に、彼の驚きは果してどれくらいだった事であろう。彼は、愛も憎みも、乃至また性欲も忘れて、この象牙ぞうげの山のような、巨大な乳房ちゅうふさを見守った。そうして、驚嘆の余り、寢床の汗臭い匂においも忘れたのか、いつまでも凝こり固かたまったように動かなかつた。——楊は、虱になつて始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来たのである。しかし、芸術の士にとって、虱の如く見る可きものは、独り女に体よたいの美しさばかりではない。

(大正六年九月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女体

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>